

研究ノート

# 瀬戸内の万葉ノート(一)

*On Setouchi-no-Man'yoshu 2*

田場 裕規

TABA Yuki

本稿は、二〇一七年五月三日〜七日に淡路・讃岐・備前・播磨・摂津の万葉故地を廻った調査の一部をもとにして  
いる。掲出する万葉歌の「訳文」は『萬葉集』(塙書房)、「大意」「語釈」「釈文」は伊藤博『萬葉集釋注』(集英社)、  
阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』(笠間書院)を引用し、適宜追加した。

## 五 淳仁天皇陵

天平宝字元年十一月十八日に内裏にして肆宴したまふ歌二首

(9) 天地を 照らす日月の 極みなく 天地を照らす日月、この日月と同じに、天皇の御代は果てしもなく

あるべきものを 何をか思はむ 続くものなのだ、なのに、何を思い煩うことがあろうぞ。

右の一首、皇太子の御歌(皇太子)

(卷二十・四四八六)

(10) いざ子ども 狂わ<sup>たわ</sup>ざなせそ 皆の者よ、狂<sup>たわ</sup>げた振る舞いだけはして下さるな。

天地の 堅め<sup>かた</sup>し国そ 大和島根は 天地の神々が造り固めた国なのだ。この大和島根は。

右の一首、内相藤原朝臣奏す。(藤原仲麻呂)

(卷二十・四四八七)

天平宝字元年（七五七）十一月十八日（太陽暦一月二日頃）に行われた、宴で行われたものである。肆宴はトヨノアカリと読ませる。豊明節会は、宮中での大嘗祭・新嘗祭の翌日、豊楽殿で行われる宴会。陰暦十一月なかの辰の日（大嘗祭の時は午の日）、天皇がその年の新穀を食し、群臣にもこれをたまわる宴である。

○天地を照らす日月の極みなく 天地いっばいにわたって光を照らす太陽や月のように限りなくの意。○何をか思はむ 何を不安に思ったりするものかの意。○皇太子 舍人皇子の子、大炊王。この年の四月四日に立太子。後の淳仁天皇。○いざ子ども 宴で目下の者を呼ぶときの慣用句。○狂わざなせそ たわけた振る舞いはするなの意。「な—そ」は禁止の用法。橘奈良麻呂の叛乱を背景にして言った語。○天地の堅めし国ぞ 「天地」は前歌の天地を承ける。○大和島根は 「大和」を海上から陸地として見た語。海に力強く根を張っている聖なる国の意と思われる。

◆淡路島に配流された天皇 四四八六歌は、大炊王の歌である。大炊王は、天武天皇の孫にあたり、父は舍人皇子。天平勝宝九歳（七五七・八月）に天平宝字と改元。三月、前年、聖武太上天皇の遺詔によって立った道祖皇太子（天武天皇の孫、新田辺皇子の子）が孝謙天皇の発議によって廢された。道祖王は、諒闇にあつて慎みがなかった。そこで、舍人皇子の子から皇太子を選ぶべきだということになり、船王、池田王、大炊王の名が挙がった。しかし、船王は「閭房修まらず」池田王は「孝行闕くことあり」いって退けられた。さらに新田辺皇子の子、塩焼王も挙がったが、太上天皇時代に無礼のこともあり、ということでも退けられ、大炊王について「唯、大炊王、未ダ長壯にアラスト雖モ、過悪ヲ聞カズ。コノ王ヲ立テムト欲フ」という見解があり、四月には皇太子となった。

◆参考

○押勝、進退扱を失ひ、即ち船に乗りて浅井郡塩津に向ふ。忽ち逆風有りて、船漂没せんとす。……更に山道を取りて直ちに愛発を指す。伊多智らこれを拒きて：押勝即ちまた還りて高嶋郡三尾崎に到り、佐伯三野、大野真本らと相戦ふこと午より申に及びて官軍の疲頓なり。……押勝遙かに衆の敗るるを望みて船に乗りて亡げ、諸の将、水陸両道よりこれを攻む。押勝、勝野の鬼江を阻み、鋭を尽して拒ぎ戦ふ。官軍、これを攻め撃つ。押勝の衆潰えて、独り妻子卅四人と船に乗りて江に浮ぶ。石楯獲へてこれを斬る。及びその妻子徒党卅四人皆これを江の頭に斬る。（『続日本紀』四・天平宝字八年九月条・四五頁）

○帝の位をば退け賜ひて、親王の位賜ひて淡路国の公と退け賜ふ……。事畢りて、公とその母とを將ゐて小子門に到り、道路の鞍馬を処めて騎せしむ。右兵衛督藤原朝臣藏下麻呂、配所に衛り送りて、一院に幽む。勅して曰はく、「淡路国を大炊親王に賜ふ。国内に有てる官物調庸等の類はその用ゐる所に任す。但し出挙の官箱は一ら常の例に依れ」とのたまふ。(『続日本紀』(四)・天平宝字八年十月条・二九頁)

## 六 藤江の浦

(9) 荒たへの 藤江の浦に

すずき釣る 海人とか見らむ 旅行く我を

一本に云はく「白たへの 藤江の浦に いざりする」

あらたへの原料の藤と名の付く藤江の浦に

鱸を釣る海人をみるのだからか。旅行く私は。

或る本で言うには「白たへの原料の藤の名の付く藤江の浦で漁をする」

(卷三・二五二)

○荒たへの 「荒妙の材料である藤」というつづきで「藤」を含む地名「藤原」「藤井」「藤江」にかかる枕詞。(卷一・五〇)の「藤原の宮の役民の作る歌」に「やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 荒栲の 藤原が上に」とある。藤蔓の布の意。○藤江の浦 明石市西部。野島の北星。藤井の浦ともいう。現在、山陽電鉄藤江駅。江井島一帯の海浜をさすか。○すずき 鱸のこと。瀬戸内海沿岸部に多い浅海魚。晩春から初秋にかけてよく釣れるという。○海人とか見らむ 見知らぬ人は私を漁師と見るであろうか、の意。「海人」の原文は「白水郎」。「白水郎」は、中国揚子江河口付近に住み、漁撈を生業としていた住民(男子)の称。万葉の「あま」は男女双方にいう。○旅行く我を 官命によって旅行く私なのに。

## 七 網の浦(讃岐国)

讃岐国の安益郡に幸す時に、軍王、山を見て作る歌

(10) 霞立つ 長き春日の

霞の立つ長い春日の日が、

暮れにける わづきも知らず

むら肝の 心を痛み

ぬえこ鳥 うら嘆け居れば

玉だすき かけの宜しく

遠つ神 我が大君の

行幸の 山越す風の

ひとり居る 我が衣手に

朝夕に 反らひぬれば

ますらをと 思へる我も

草枕 旅にしあれば

思ひ遣る たづきを知らに

網の浦の 海人娘子らが

焼く塩の 思ひぞ燃ゆる

我が下心

いつ暮れたのかわけもわからぬほど

この胸のうちが痛むので、

ぬえこ鳥のように忍び泣きをしていると、

玉櫛を懸けるというではないが、懸けて想うのに具合よろしく、

輝かしい我が大君の

お出ましの地の山向こうの故郷の方からカミの運んでくる風が、

ひとりでいる私の衣の袖に、

朝な夕な、帰れ帰れと吹き返るものだから、

りっぱな男子だと思っている私としてからが、

遠い旅空にあることとて、

思いを晴らすすべも知らず、

網の浦の海人娘子たちが

焼く塩のように、ただ焼け焦がれている。

ああ、切ない我が胸のうちよ。

(巻一・六)

○安益郡 香川県紋歌郡東部。○軍王 舒明朝に渡来した百済王子余豊璋か。この歌は、斉明七(六六二)年の作らしい。「軍王」はコニキシノオホキミと読むが、定説はない。古代朝鮮語で、「コニ」は大の意、「キシ」は君の意か。コニキシは百済王族の渡来人に与えられた姓。○霞立つ 「春日」の修飾語、枕詞的用法。○長き春日 当時、春の日は長く、秋の日は短いと考えられていた。○わづき 区別された情態の意か。孤語で他に例がない。「わき」(区別)と「たづき」(状態)とが混線した形かともいう。○むらきもの 「心」の枕詞。「むらきも」は「群胆」で心臓・肝臓・肺臓・胆嚢など、群がる臓器の意。人間の思いの根源である心を臓器と見る発想は万葉歌に多い○心を痛み心が痛いので。「痛み」は「痛し」のミ語法。万葉に頻出する。○ぬえこ鳥 とらつぐみ。「こ」は愛称。「ぬえ鳥」と

も。悲しそうに鳴く。ここは「うら泣き」の枕詞。○うら泣き居れば「うら泣く」は心の内で泣く意。○玉たすぎ神祭りの折に懸ける襷で、「懸く」の枕詞。「玉」は魂の意をこめるほめ言葉。○懸けのよろしく。かかわらせるのうつつけに、の意。「かひらひぬれば」に続く。○遠つ神「我が大君」の枕詞。遠い昔の天つ神のような、の意。天つ神の血筋を受ける天皇を尊んでいう。○山越す風「越す」は「越ゆ」の他動態で、越えさせる、運ぶ、の意。人・鳥獣には「越ゆ」、風・浪などには「越す」という。これは、風や浪はそれ自身が越えるのではなく、山の神や海の神が越えさせるといふ、古代人特有の自然観に基づくものであるらしい(木下正俊『「来す」と『越す』万葉第二十三号)。○ひとり居る 故郷に置いてきた妻に対していつたもの。万葉の「ひとり」は、好きな人と離れて一人あることを悲しんでいる場合が多い。○衣手 着物の手にあたる部分で、袖の意。転じて着物全体をいう。○かへらひぬれば 袖をひるがえして風が吹くさま。望郷の念を示す句で、この歌の中心となる表現。「かへらふ」は「かへる」の継続態。「ふ」は動作の反復を表わす助動詞。○ますらを「益ら男」で、心身ともに立派な男子の意。「たわやめ」の対。宮廷官人であることを誇る意識を背景に使われることが多く、宮廷機構の充実する天武・持統朝頃から頻出する。ここは集中の最も早い例。○草枕 旅の枕詞。草を枕に寝る苦しい旅、の意。○旅にしあれば「旅」は異神あたがみの支配する、家郷以外の地に在ること。○思ひ遣る 心の憂さを追い払う意。○たづきを知らに「たづき」は「手付き」で、手がかり、手段。○網の浦 香川県坂出市の海浜。○焼く塩の 塩は海水を浸みこませた海藻を焼いて作った。以上三句は序詞。「思ひぞ焼くる」を起こす。○思ひぞ焼くる「焼くる」は下二段「焼く」の連体形。自然に焼けてくる、の意。○下心「下」はものに覆われて見えない内側をいう。心底、心奥の意。

反歌

(11) 山越しの 風を時じみ

寝る夜おちず 家なる妹を  
かけて偲ひつ

山越の風がたえず袖をひるがえすので

夜ごと夜ごと、家に待つ妻、あの愛しい妻を、私は吹きかえる風に事寄せては偲んでいる。

○山越しの風を時じみ 「時じ」は、時が定まっていない意の形容詞。「時じみ」は「時じ」のミ語法。○寝る夜落ちず 寝る夜は一晩も欠けることなく毎晩、の意。○家にある妹 家で留守を守っている妻。○懸けて偲ひつ 「懸く」は上二句とかかわる。

右、日本書紀に檢すに、讚岐国に幸すことなし。また軍王も未だ詳らかならず。ただし、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、「記に曰く、『天皇の十一年己亥の冬十二月、己巳の朔の壬午、伊予の温湯の宮に幸す云々』といふ。一書に、『この時に、宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に、斑鳩と比米と二つの鳥大く集けり。ここに勅して、多く稲穂を掛けてこれを養はしめたまふ。よりて作る歌云々』といふ」といふ。けだしこより便ち幸すか。

(卷一・六〇七左注)

この左注は、天平十七年(七四五)段階に大伴家持たちが付したものでらしい。

○山上憶良 奈良朝初期の歌人・学者。天平五年(七三三)没。「大夫」は四位、五位の人への尊称。○類聚歌林 憶良が編んだ歌集。散佚して今は伝わっていない。○伊予の温湯 愛媛県松山市道後温泉。○斑鳩 比米とともにスズメ科の小鳥。

◆(10)、(11)は、一筋縄にいかない問題がある。まず舒明天皇の「讚岐の国の安益の郡」(香川県綾歌郡の東部、国府のあった場所)への行幸があったかどうか、未詳である点である。左注にもあるように、舒明天皇の讚岐行幸の記述は史料にない。左注には、舒明天皇が伊予行幸(舒明十一年十二月)の際、この地に立ち寄ったとしているが、推測に過ぎない。そして「軍王」なる歌人の存在も未詳である。舒明三年、人質として日本の地に來た百濟王義慈の子余豊璋としているが、舒明三年、日本に到來した余豊璋が、舒明十一年に作歌に至る期間の短さは問題を残す。伊藤博氏は、「原万葉の人びとには実像の誰であるかが知られていた『軍王』も、時下る編者たち(目下の左注を加えた人たち、天平十七年(七四五)頃の大伴家持たちであったと察せられる)には不明となり、『軍王』もいまだ詳らかにあらず」ということになってしまったのであろう。(釋注)としている。

◆二〇一七年五月三日、この歌に関係する故地として「讃岐国府跡」を来訪した。JR予讃線の讃岐府中駅付近の讃岐国府跡(香川県坂出市府中町5059)は、綾川が大きく蛇行する所であり、麦畑が広がっていた。古代南海道の河内駅が国府の横にあったと推定される。木下良氏は、「南海道は国府の中央を東西に貫く『青龍』と呼ばれる中軸道路が駅路で、これに直交する国庁から北に伸びる道路が南北中軸線と考え、河内駅(坂出市府中町)は国庁横にあった」と推定する(木下良監修『完全踏査続古代の道 山陰道・山陽道・南海道・西海道』一七一頁)。舒明天皇が伊予行幸の折、讃岐国府に立ち寄ったとすれば、「山越しの風を時じみ」の山はいずれの山なのか問題になる。下田忠氏は、『山越しの風』は、綾の松山すなわち、白峯山塊五色台の山をこして都の方から吹いてくる風をいったものだろう(下田忠『瀬戸内の万葉』一一二頁)を言う。舒明天皇の行幸は確証できないが、(10)、(11)歌の景観は、歌の内容や下田氏の指摘をもとに考えると、「讃岐国府跡」よりもっと坂出市の海岸に近かったのではないだろうか。◆「讃岐国府跡」には、菅原道真も赴任した。仁和二年(八八六)正月十六日、讃岐国守に任じられた。四十二歳のころである。近隣には鼓岡神社があり、崇徳上皇ゆかりの地でもある。

## 八 狭岑の島

讃岐の狭岑の島にして、石の中の死人を見て、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首へ并せて短歌▽

(12) 玉藻よし 讃岐の国は

玉藻のうち靡く讃岐の国は、

国からか 見れども飽かぬ

国柄が立派なせいはいくら見ても見飽きることがない、

神からか ここだ貴き

国つ神が畏いせいかまことに尊い。

天地 日月と共に

天地・日月とともに

足り行かむ 神の御面と

充ち足りてゆくであろうその神の御顔であるとして、

継ぎ来る 中の湊ゆ

昔から受け継いで来たこの那珂の港から

舟浮けて 我が漕ぎ来れば

船を浮かべて我らが漕ぎ渡って来ると、

時つ風 雲居に吹くに

突風が雲居遥かに吹き始めたので、

沖見れば とる波立ち

辺を見れば 白波騒く

いさなとり 海を恐み

行く舟の 梶引き折りて

をちこちの 島は多けど

名くはし 狭岑の島の

荒磯面に 廬りて見れば

波の音の 繁き浜辺を

しきたへの 枕になして

荒床に ころ伏す君が

家知らば 行きても告げむ

妻知らば 来も問はましを

玉粹の 道だに知らず

おほほしく 待ちか恋ふらむ

愛しき妻らは

沖の方を見るとうねり波が立ち、

岸の方を見ると白波がざわめいている。

この海の恐ろしさに

行く船の楫を折れるばかりに漕いで、

島はあちこち多いが、

中でもとくに名の靈妙な狭岑の島に漕ぎつけて

その荒磯の上に仮小屋を作って見やると、

波の音のとどろく浜辺なのに

そんなところを枕にして、

人気のない岩床にただ一人臥している人がいる。

この人の家がわかれば行つて知らせもしよう、

妻が知つたら来て尋ねもしように、

ここに来る道もわからず

心配しながら待ち焦がれていることだろう、

いとしい妻は。

(巻二・二二〇)

○讚岐 香川県。○狭岑の島 塩飽諸島中の沙弥島。今は、埋め立てによって、坂出と陸続きになっている。○石中

死人 海岸の岩石の中に横たわる行路死人。○玉藻よし 「讚岐」の枕詞。立派な藻を産するの意。「よし」は詠嘆。

○国から 「から」は「柄」で、素性、品格。○ここだ責き 「ここだ」はこんなにもはなはだしくの意を示す副詞。

「貴き」は、上の「か」を承けて結んだもの。○神の御面 讚岐を讚える言葉。『古事記』国生み神話に、四国(伊予)

は身一つで面四つの島とし、そのうち、讚岐は飯依比古といふと伝える。○中の湊ゆ 那珂の港から。丸亀市西南部

中津、金倉あたり、金倉川の河口付近という。「狭岑の島」まで、約八キロ。○時つ風 海岸地方で毎日定期的に吹

く海陸風のうち、海からの風。○とぬ波 大きくうねる波。「とぬ」は「撓<sup>たむ</sup>」の意。「とをよる」（しなやか）の「とを」と同根。○梶引き折りて 折れるばかりに楫を強く引き寄せて漕ぐことをいう。「梶」は大型の船に固定させて用いる。○荒磯面 アリソオモの約。荒磯の表面。○荒床 荒涼として人気のない寝床。石中死人の臥している場所をこういったもの。○ころ臥す 「ころ」は他からの拘束によらず自ら、の意。「臥す」は死んで横たわっているさま。敬避表現の一つ。○おほほしく「おほほし」は、心がぼんやりして晴れないさま。

反歌二首

(13) 妻もあらば 摘みて食べまし

沙弥の山 野の上のうはぎ

過ぎにけらずや

せめて妻でもここにいたら、一緒に摘んで食べたこともできただろうに。

狭岑の山の野辺一帯の嫁菜は、

もう盛りが過ぎてしまっているではないか。

(巻二・二二二)

○妻もあらば せめて妻だけでもここにいたならば。○食べまし「食ぐ」は食べる意の下二段動詞。「まし」は反実仮想。○うはぎ 嫁菜の古名という。若芽を食用とする。○過ぎにけらずや「けら」は過去の助動詞「けり」の未然形。「ずや」は眼前の事実について人の注意を喚起し、同意を求める語法。「や」は反語。

(14) 沖つ波 来寄する荒磯を

しきたへの 枕とまきて

寝せる君かも

沖つ波のしきりに寄せ来る荒磯なのに、

まあこの人はそんな磯を枕にして

横たわっておられるよ。

(巻二・二二二)

○来寄する荒磯を 海岸にうち寄せる波についてはヨスをいうことが多い。「を」は、長歌の「繁き浜辺を」の「を」と同じく、格・逆接・詠嘆を表わす。○しきたへの「枕」の枕詞。○枕とまきて「まく」は枕にする意。○寝せる 長歌「ころ臥す」と同様、



沙弥島「人麻呂碑」と瀬戸大橋  
2017年5月5日

死んで横たわっていることをいう。「寝す」は下二段動詞「寝<sup>ぬ</sup>」の尊敬態。挽歌において、生きている人に対するように「寝す」というのは、この例のみという。

◆狭岑の島は現在、沙弥島（香川県坂出市沙弥島）と呼ばれる。「ナカンダ浜」と呼ばれる浜辺は、昔の面影を残すが、埋め立てによって若干の潮の流れの変化によって浸食されているように思われた。しかし、緩やかに孤を描く浜辺に降り立つと、遠くに鷺羽山の山容を見ることができる。塩飽諸島の島影も波間にはつきりと見えた。瀬戸大橋のたもとにあり、坂出市から埋め立てられ、陸続きになっている。「柿本人磨碑」は昭和十一年、作家中河与一氏（香川県出身の小説家・歌人。新感覺派）が建立したものである。碑の裏の石板には、「文武天皇の大御世 柿本人磨中之水門よりこの島に航海し來り 長歌一首短歌二首を作る 中之水門は今仲多度郡中津附近なるべし 途上海路の風色を讚嘆し この島に廬りて 石中の死人を視 作歌す 惻隱の心懷 哀烈の神韻共に古今に絶す 地を卜して今その紀念碑を建つ 人來りて懷古し わが民族の血統を思ふべし／昭和十一年十月中河與一記」とあった。昭和十一年は、二・二六事件が起き、日本の情勢が変化していく時期である。中河は翌昭和十二年、雑誌『日本浪漫派』に参加し、戦時下は民族主義に傾いていった。◆風待ち、潮待ちに適したところで、下田忠氏は『中の湊』（丸亀市金倉川河口あたり）から船出して漕ぎ来たたと長歌にあるから、彼らは引き潮に乗って東進していたはずである。突風は西から激しく吹き、急いで船の艫を引きたわめて、西風を防ぐに格好なこの浜辺に船をつないだものと考えられる。」と推定する。万葉研究会「明日香風」の下門龍伸によると、二〇〇七年七月に沙弥島を訪れると、島に吹き付ける西風が強烈だったと言う。西側の海水浴場は荒れていても東側のナカンダ浜に廻ると驚くほどの静けさであったらしい。下田氏の見解とも通じる。

◆人麻呂は、なぜ讃岐を訪れたのか、その真相は分からない。伊藤博氏は、題詞に「反歌」とあることから推して、持統五年（六九二）以前の旅とみるべきだとした。瀬戸内海を西から東に移動して、那珂の港で一泊し、明けて船を出したときに、詠んだ歌と思われる。古代、旅先において行路の安全を祈る習慣があった。(12)、(13)、(14)は狭岑の島で朗誦されたものと見ることができ。歌によって旅先的情況を、都の人達に聴かせることは、旅に出たものの仕事で

もあつた。

参考文献

- 下田忠 『瀬戸内の万葉』 (桜風社、一九八四年)  
伊藤博 『萬葉集釋注一』 (集英社、一九九六年)  
犬養孝 『改訂新版』万葉の旅 下』 (平凡社、二〇〇四年)  
阿蘇瑞枝 『萬葉集全歌講義第一卷』 (笠間書院、二〇〇六年)  
中西進編 『万葉集事典』 (講談社、一九八五年)  
大久間喜一郎・森淳司・針原孝之編 『万葉集歌人事典(拡大版)』 (雄山閣、二〇〇七年)